



「はい、これより、『会咄』が催されます。集まった方々が小咄をご披露され、出来のよい方には、結構なお品がもらえるのやそうです」

「なるほど。おやっ、お女中、こちらの座敷でも大きな声がしておるな」

「はい、四人のご出家様が、お食事をお召し上がりで」

「お女中！お女中うー」

「はあーい、ただ今。隣の座敷からお呼びでございます。それでは、ご出家様、失礼いたします……はい、何か御用でございますか」

「おお、お女中、主（あるじ）殿をお呼び願いたい」

「主に何か御用で」

「来れば分かる。即刻、来てもらいたい」

「しばらくお待ちを」

「当家の主でございますが、何か御用で」

「おお、主殿。ご当家の評判を聞きつけ、僧侶四人でこちらへ訪れたが、我々は高野一山の僧侶。幼き頃から修行に明け暮れ、生臭物は一切口にいたしておりませぬ」

「はい、それは、お伺いしておりますので、お精進ということで、お出ししておりますが」

「ならば、伺おう。この汁物。出汁は何をお使いになりましたかな」

「はい、私共では、土佐を使わせていただいております」

「土佐とは、一体何でございますかな」

「はい、鰹節のことでございまして」

「何っ、鰹節とな。鰹節とは、何で拵える物じゃな」

「はい、鰹という魚を干しまして」

「ならば、魚類であるな」

「はい…あっ、これは申し訳ございません」

「黙らっしゃい。我々は高野一山の僧侶。幼き頃から修行に明け暮れ、生臭物は一切口にいたしておらぬ」

「どうぞ、ご勘弁下さいませ。早速、お清めの塩を取り寄せますので」

「黙らっしゃい！もう間に合わぬ。一度、生臭物を口にいたさば、塩で清めたくらいでは納まりませぬ。うーん、これで今までの修行が無駄になり申した。貴僧はどう思われる」

「はい、今更、高野には戻れませぬな」

「いかにも、面目が立ちませぬ」

「お大師様に申し訳がない」

「皆もそう思われるか。と申して、我々は坊主の修行のほかは、何も知りませぬ。このまま衣を脱いでも、暮らしを立てる術がない。この度の一件は、この家で生臭物を出されたことから始まったのじゃ。どうじゃ、主殿。これから先、この四人を、この家で養ってもらいたい。なあ、皆の衆。そうと決まれば、生臭物は解禁、酒もいただく。さあ、主殿。精進から生臭物に替えて下され。さあ、早うに頼むぞ」

「ちょっと、失礼を」

「何者じゃ、その方は」

「隣の座敷の者でございます。襖越しにお話を承りましたぞ。愚僧も仏に仕える身。人の過ちを許すのも、僧の心として肝心ではござらぬか。ここは、穏便に願いたい」

「何を申される。これは我々と、この家の主との話。貴僧には関わりのないこと。お引取り下され。拙僧たちは高野一山の者じゃ」

「ほう、高野一山の僧とな。ならば、貴僧たちは、愚僧の面体をご存知ではござらんかな」

「何っ、知らん」

「存ぜぬ」

「一向に」

「全く覚えがない」

「ここな、偽り者めが！我こそは、高野一山の真覚院なり。愚僧の面体を知らずして、高野一山の僧と申すか。その方らは、僧籍を偽り、庶民を苦しめる悪者に紛れなし。贋坊主、偽り坊主、生臭坊主。いやさ、蝟坊主う！」

「何っ、我らが何故に蝟坊主と言われねばならぬ。もう許せん。四人で目に物見せてくれん。それっ」

「心得た」

「年は取れども、その方達に負ける腕ではない。庭の池にて顔を洗うがよいわ。えーい」

「わあーっ、ドボーン」

頭からズブズブッと沈んでいきます。水の表に足が二本ニョキッ……

「わあーっ、ドボーン」

「わあーっ、ドボーン」

「わあーっ、ドボーン」

水の面に足が八本並びました。  
「いよっ、蛸坊主う」

❖ ❖

## 6 死ぬなら今

ここにございました赤螺屋（あかにしや）ケチ兵衛。名前の通りのドケチでございまして、人の足を引っ張るどころか、前を行く人を後から突き倒して、それを踏みつけていくというような、あこぎな世渡りをして一身代を築きあげました。しかし、人間、金がなんぼあっても病には勝てません。ふとしたことが元で、患いつき、明日をも知れんということになってしまいました。

そこで、遺言をいたします。

「わしは、もう長ごうない。人間、死んだら地獄とか極楽へ行くそうじゃが、わしのようにあこぎなことをしてきた人間は、地獄へ落とされるじゃろう。けどな、昔から『地獄の沙汰も金次第』ちゅうやろ。金さえ積みば極楽へ行ける術（すべ）もあると思うのじゃ。金の力とはそういうものじゃ。そこで、わしが死んだら、棺桶に、小判を千両入れてもらいたい」

そう言い残すと、ケチ兵衛さん、あの世へ行ってしまいました。

ところが、息子のケチ太郎というのが、親以上のケチときておりますので、遺言通りにする訳がありません。『死んだ者に千両もやることはない』と考えまして、ここは、偽物でよかろうと、芝居で使う偽小判を千両入れて、葬ってしまいます。

何にも知らんケチ兵衛さん。そのまま地獄へまいりますと、閻魔大王の前へ突き出されます。

「こりゃ、赤螺屋ケチ兵衛とは、その方か。面を上げい。余は閻魔大王である」  
「へへーっ」

「その方、娑婆では随分悪逆非道なる行いをしておるな。並の悪者なら『針の山』へ登らすのじゃが、それでは手ぬるい。『針の山』の後、『血の池』へ追い落そう」

「へへーっ。えらいことになったなあ。『針の山』だけでも恐ろしいのに、『血の池』まで放り込むて……やっぱり、地獄というところは怖いところやな。けど、こんな時のために、千両持ってきたんや。ここで使わんと……ええ、閻魔様、ちょっと、お話が……」

「何じゃ？」

「お土産を持参いたしましたので……」

「ん……土産とは？」

「大阪名物の粟おこしでございます。ドッコイショと（菓子折を渡す）」

「ん、（箱を受け取り、箱の底を改める）うーん、流石よのう……そうじゃなあ、ケチ兵衛。その方、娑婆での行いを悔い改めておるようじゃから、特別に、『極楽行き』としてやろう」

正に、地獄の沙汰も金次第でございます。

ところが、これを聞いた他の鬼どもが納まりません。

「おい、聞いたか」

「何を」

「何をて、閻（えん）ちゃんの話」

「閻ちゃんが何言うた」

「お前聞いてへんのんか。ケチ兵衛の菓子折を受け取ってから、急に風向きが変わってしもたがな……もうし、閻魔大王様。あんた、そんな依怙贖したらあきまへんがな」

「これこれ、喧しい。鬼ども、皆、静かにせい」

「さっきの菓子折、あれ何でんねん」

「ん、菓子折？……ん……見られたか……見られたのなら仕方がない。お前らにも分けてやるわ」

さすがの閻魔大王も、汚職がばれるのを恐れて、小判を鬼たちに分け与えました。

さあ、この小判が地獄界を回り回って、地獄中はひっくり返るような景気で。朝の早うから、閻魔の役所へ出勤するような殊勝な鬼は一匹もおりません。

「おい、赤鬼」

「こら、向う先見て物ぬかせ。わしは、生まれた時から青鬼じゃ」

「そやけど、お前。身体中真っ赤やで」

「飲み過ぎて、酔いが醒めんのじゃ。もっぺん、キャバレー『鬼ごろし』へ繰り込むぞ。ワーワーッ！」

地獄中大騒ぎになっております。ところが、この小判の一枚が、極楽の警察に舞い込んできました。

「これ、この小判はどこから来たのじゃ」

「地獄からまいりました。今、地獄では、ケチ兵衛という亡者のばらまいた小判が大量に出回って大騒ぎになっております」

「なに、地獄から来たと申すか。この小判をようつく見るがよい。これは偽小判じゃ。このような物を使うのは、娑婆でも地獄でも極楽でも大罪じゃ。こういう重大なることを目こぼしにすると、地獄の方も大分弛んでおるな。何じゃと。この小判に翻弄され、閻魔を始め地獄中が仕事をせんとな。ますますもってけしからん。こういうことを取り締まる閻魔が、こともあろうに。いやあ、嘆かわしい。地獄を肅清せねばならん」

直ちに、極楽から武装した役人が地獄へ送り込まれ、閻魔大王を始め、赤鬼、青鬼など、地獄中の役人を全員ひっ捕らえ、牢屋へ放り込んでしまいました。

今、地獄には誰もおりません。

死ぬなら、今です。

(次回は、お酒特集で、「ふぐ鍋」と「親子酒」)